



Title	石濱純太郎を紹介する新聞記事2件(1923年, 1927年) および解説
Author(s)	堤, 一昭
Citation	石濱文庫の学際的研究 -大阪の漢学から世界の東洋学へ- 平成23年度大阪大学文学研究科 共同研究 研究成果報告書. 2012, p. 16-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100403
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

石濱純太郎を紹介する新聞記事2件(1923年, 1927年)および解説

堤 一昭(文学研究科・共生文明論)

今年度の石濱文庫調査では、まず図書をはじめ各種資料の所在概要を把握することにつけた。その過程で、石濱純太郎の活動を紹介する記事が載る新聞が二紙見つかった。(1)大正12年(1923年)11月8日の『関西日報年中無休刊』と、(2)昭和2年(1927年)6月22日の『東京日日新聞』である。(1)には大阪外國語学校の選科生として在学中、帝大卒業の紳士が蒙古語を勉強していることを珍しいとして紹介した記事が載る。(2)には「学界新風景」という連載記事の一つに、石田幹之助、羽田亨とともに新進の東洋学者として紹介されている。

この二紙は石濱自身が大切に保管していたものであろうが、40年余り前の石濱文庫受け入れの後も特に注目されることのないまま、未整理・未登録で現在にいたっていた。これらに載る2件の記事については管見の限り、これまで言及したものを見ない。また『関西日報年中無休刊』は後継紙『毎日新聞』のある『東京日日新聞』とは異なり、所蔵する図書館も稀なようである。自身が発表した論考以外は現在知られることの少ない、36歳~40歳の石濱の、当時の社会から見た動向について知ることができる貴重な記事である。

2件の記事を以下に紹介し、注記して解説を加えたい。かなづかいや句読点も原文の通りとするが、ふりがなは省く。注番号や解説は今回新たに加えたものである。なお、専門家や、ある世代以上には常識と思われる語句も煩をいとわず注記した。

1. 【『関西日報年中無休刊』大正12年(1923年)11月8日(三)面】

「赤門出の文學士さん⁴が若い学生に交つて蒙古語のお稽古 近く博士論文も出すと云ふ」

大阪外國語学校の蒙古語科教室に今若々しい青年と机を並べて勉強してゐる一見教授と見違へるような紳士⁵がある。

その紳士こそは、明治四十四年東京帝國大學文學科出身の支那文學専攻の文學士⁶石濱純太郎氏で、氏は帝大卒業後京都大學に於て研究し⁷尚東洋史研究の必要で蒙古語科に入學し

⁴ 赤門出の文學士さんが…:「赤門出」=東京帝國大学卒業生が、専門学校で学生として学んでいること自体が珍しく、しかも学んでいるのが珍しい「蒙古語」ということで記者が取材したものだろう。1888(明治21)年生まれの石濱は当時36歳、蒙古語部の新入生の平均年齢は19歳。

⁵ 大阪外國語学校の蒙古語科教室に…:前年の大正11年(1922)4月に大阪外國語学校は初めての入学生255名を迎えた。内訳は本科生240名、選科生1名、委託生14名。石濱は唯一の選科生であった。後文にあるように「無理に校長にお願ひして入學させて戴いた」のかも知れない。校長は中目覚(なかのめ・あきら)。

⁶ 明治四十四年東京帝國大學…:1911年。卒業論文は、北宋の政治家、文人で唐宋八大家の一人、歐陽脩を取り上げて漢文で執筆した「歐陽脩研究」。

⁷ 京都大學に於て研究し:記事の年1923年に京大助教授の羽田亨(当時は言語学講座)が大

たものであつて、その研究の熱心なる點には、同級生⁸は皆驚いてゐるが、氏は最近支那文學に関する博士論文を起草中今度の震災のため東京に残した貴重な参考資料が全部鳥有に歸し⁹、研究に一大支障を生じたが、氏は更に屈せず論の筆を進めてゐる¹⁰さうである

一日記者は上本町七丁目の同校¹¹を覗いて氏に面接を求める、同校には大正六年に京大を出た東洋思想史の教授浦川文學士¹²あり氏とは所謂同窓である等珍現象^{アマ}た導かれるままに記者は第二應接室に入る、

氏と相對してみると、その溫和な學者的風貌が、社會學の高田博士¹³を偲ばせるに十分である。記者は直に、博士論文の事を聞くと、氏は迷惑さうに『そんな事は決してありません。まだまだこれからです、一生學究の徒であり度いと私は願つてゐます。蒙古語の研究も東洋史を徹底的に調べ度いと思ひまして無理に校長にお願ひして入學させて戴いたのです私は元來東洋的なものに非常の趣味を持つてゐますが今では若い學生と一緒にやつて行くのはなかなか骨です』と咲笑した。

阪外國語學校蒙古語部に出講している。それ以前、大正5年(1916)に京都の漢學の文会「麗澤社」と、石濱が前年に入会した大阪の文会「景社」が初めての連合会を開き、そこで京大の内藤虎次郎(湖南)、狩野直喜らとも出会っている。これらの繋がりで、石濱が彼ら京大の研究室出入りしていたのだろうか。

⁸ 同級生：蒙古語部は学年定員10名で、しかも開校翌年となるこの記事の年大正12年には募集していない。蒙古語部第一期生に、後に母校の教授となる精松源一がいた。

⁹ 支那文學に関する博士論文を起草中…：卒業論文「歐陽脩研究」は東大図書館に収められていたんだろう。それを元にした博士論文を起草していたのだろうか。石濱は前年の7月から9月に東大図書館で蒙文藏經を調査している。「支那文學」ではないが、この調査との関連も気になる。「今度の震災」とは大正12年9月1日の関東大震災。この新聞記事はわずか2か月後である。東大図書館は全焼して、石濱が調査していた蒙文藏經も焼失した(内藤湖南「焼失せる蒙滿文大藏經」『内藤湖南全集7』筑摩書房)。

¹⁰ 論の筆を進めてゐる：卒業論文「歐陽脩研究」に基づく著作は、「石濱純太郎先生著作目録」には見あたらない。また『支那學論攷』(昭和18年(1943))等により、石濱に文学博士号が関西大学から授与されたのが昭和32年(1957)である。この書は敦煌文献や『群書治要』の研究を中心としており、中国文学関係の論考は含まない。震災の影響は大きかったのかも知れない。

¹¹ 上本町七丁目の同校：大阪外國語學校・大阪外國語大学は、昭和54年(1979)に現在の大坂大学箕面キャンパスの地に移転するまで、大阪市内上本町にあった。

¹² 浦川文學士：浦川源吾。開校当初の時期、漢文を担当した。立命館大学夜間科時代に浦川の授業を受けた白川静は、「漢文科の教授には、……酒豪をもって知られた浦川源吾という人がおられました。夜学という氣樂さもあって、寒いときなどは一杯きこしめした後で、出てこられるものですから、氣焰万丈、本題に入らずして一夕を終わるというようなことが、しばしばありました。」と語っている(白川静『回思九十年』平凡社、2000年、pp.108-109)。

¹³ 社會學の高田博士：高田保馬(1883-1972)。当時は東京商科大学(現 一橋大学)教授、戦後に大阪大学社会經濟研究室(現 研究所)長。

2. 【『東京日日新聞』昭和2年(1927年)6月22日(四)面】

「學界新風景(19) 東洋學の三人男 隠れた學者石濱氏¹⁴ 一記者」

丸善¹⁵に三冊のパンフレットが届いた。それには未だかつて眼に觸れたことのない怪異な文字が羅列してゐた。流石洋書には自信の強い魯庵翁も¹⁶、遂には投げ出して、そのまま机に積み重ねておいたのである。ふと、思いついたのが、お得意客でも特に組織立つた買ひ方をして、常に丸善をリードしてゐてくれる¹⁷大阪の石濱純太郎といふ人の事だった。

◇そこで、取りあへず一部を送つてみると、三日も経ぬうちに、返事が來た。文面には『これはシヤム語の藏經目錄¹⁸です。赤印をつけた書物だけ、早速注文して下さい。』とあつて、シヤムあての封筒まで、親切に同封されてあつた。『全く驚いた人だよ！』と魯庵翁は、ほんたうにびつくりしたやうに、感嘆詞まじりで客あれば話すのである。

◇ここで語らんとする石濱純太郎氏は、大阪の古い製薬商のぼんち¹⁹である。東大の故箭内教授²⁰の後任に、東京のモリソン文庫²¹主任の石田幹之助²²氏と共に、教授たるべき噂に上つたことがある。東大時代には支那文學をやり、石田氏と相前後して大學を出た²³。石田

¹⁴ 隠れた學者石濱氏：東京発行の新聞であるためか、大阪、在野での石濱の活動は“隠れた”と映ったか。記事に載せてある顔写真も石田幹之助のものである。

¹⁵ 丸善：近代日本における代表的な洋書輸入書店。「外国書の輸入は明治時代から一九二〇年頃まではほとんど丸善の独占的業務だった。」(脇村義太郎『東西書肆街考』岩波書店、1979年、p.171)

¹⁶ 魯庵翁：内田魯庵(1868-1929)。明治期に活躍した文芸評論家、小説家。英文学、フランス文学、ロシア文学の翻訳・紹介でも知られる。丸善の書籍部門の顧問をしていた。

¹⁷ 常に丸善をリードして…：「(石濱)博士は、大正8,9年頃から昭和12,3年頃までの間に、丸善を通じて輸入された東洋学関係の洋書は、ほとんどもれなく買ったという噂がある。これはほんとうにその通りであったようである。」(外山軍治「石浜文庫について」『石浜文庫目録』1979年所収)と言われるほどだから、丸善にとっても大事な顧客であったに違いない。

¹⁸ シヤム語の藏經目錄：この文面にある通り、送り返したためか、『石浜文庫目録』(1979)には、この目録は見あたらない。また、注文したシヤム語(タイ語)の図書が何かも未詳。

¹⁹ 大阪の古い製薬商…：父の豊蔵が興した丸石製薬のこと。明治43年(1910)の父の死後、家督を相続して丸石製薬合名会社社員であった。もっとも「製薬会社の経営は他人にまかせ、余裕のある環境で学問の道一筋にゆくことができた」(外山軍治、前掲「石浜文庫について」)ことが、「ぼんち(若だんな)」と書かれる所以でもある。

²⁰ 東大の故箭内教授：東洋史の箭内亘(やない・わたり、1875-1926)。モンゴル帝国史に焦点を絞った研究を進めた。没後、研究論文をまとめた『蒙古史研究』(1930)は現在でも参照される名著。箭内の後は、和田清(1890-1963)が引きつぎ、『東亞史研究・蒙古編』等の著作を遺した。

²¹ モリソン文庫：1917年に三菱財閥第3代の岩崎久弥が、ジョージ・アーネスト・モリソンの所蔵する、中国に関する欧文文献の膨大なコレクション(モリソン文庫)を購入し、それが現在の東洋学の専門図書館・東洋文庫の基礎となった。

²² 石田幹之助：1891-1974。モリソン文庫から設立当初の東洋文庫主任/主事を務めた東洋学者。著作集全4巻がある。石田・石濱共編の『東洋学叢編一』(1934)は、石濱との交友を物語る。石田からの書簡が石濱文庫に残り、葉書のみでも40点ある。岡崎精郎「石濱・石田両博士学術交流記録抄(正)・続・三」(『古代文化』35-8, 1983; 『名古屋学院大学論集社会科学篇』20-2, 1983; 『追手門学院大学東方文化学科年報』3, 1988)がある。

²³ 東大時代には…：石濱は明治44年(1911)卒[注3参照]。石田は大正5年(1916)東洋史学

氏が芥川久米²⁴の諸氏と同期であるから前途なほ春秋に富む身だ。ぼんち育ちの道樂に、書物あさりをするうちに、いつの間にか、東洋關係の言語學や文獻學における恐るべき權威者となつてしまつた。

◇語學にかけては、お定まりの西洋語は勿論、サンスクリット、蒙古語及び西域の西夏語²⁵に至るまで、十數ヶ國語を操る天才。わが國で蒙古語の新聞を蒙古から全部取寄せて讀んでゐる²⁶のは、陸軍の參謀本部の外に、ひとり石濱氏を數えるのみであるといふ。更に一步進める人は、先日語つたところのネフスキ一氏²⁷と、この間まで北京でカラハン大使の秘書をしてゐたイワノフ氏²⁸と、そしてこの石濱氏との、たつた三人だけであるといふことだ。

◇大阪では、近所の人々も純太郎ぼんちの學問道樂のことは知つてゐたが、こんな寶物みたいな學者になろうとは、そこまで先見の明がなかつたさうだ。いつまでもぼんちタイプで手に負えなかつたが、一昨年だつたか、内藤湖南博士に伴はれて外遊²⁹してからは、とんと風采が上つたやうである。外遊といつてもロンドンのブリティッシュ。ミウジアムに

専攻卒。「年譜略」によれば、石濱・石田が相知つたのは大正 10 年(1921)年頃という。

²⁴ 芥川久米：芥川龍之介と久米正雄。二人とも夏目漱石門下で、石田と東大文学部同期(二人とも英文科)。既に文壇で有名であった。石田の著作集に芥川の思い出が載る(第 1 卷)。

²⁵ 西域の西夏語：石濱は、未解読だった西夏文字の研究に、後の文章で出るネフスキ一を語らつて挑戦し、共著論文数本を発表した。だが、彼らの世代には一部の解読にとどまり、全面的な解読は石濱とも交流があつた西田龍雄(1928)の研究による。

²⁶ 蒙古語の新聞…：現在、石濱文庫所蔵のモンゴル語の新聞で著名なものは、『奉天蒙文報』(1918-20)、『蒙古新報』(1937-40)、『兒童新聞』(1939-40)、『青旗』(満洲國・新京, 1941-45) いずれも旧満洲地域のものである。記事の 1927 年当時、「蒙古から取寄せ」た蒙古語の新聞が何を指すかは未詳。

²⁷ ネフスキ一氏：東洋学・民俗学者ニコライ・アレクサンドロヴィッヂ・ネフスキ一(Николай Александрович Невский, 1892-1937)。当時、大阪外国语学校講師(ロシア語)。この年 9 月に石濱、ネフスキ一と浅井恵倫・高橋盛孝らは東洋学の学術団体「静安学社」を結成し、重建懷德堂を活動の場とした(生田美智子『資料が語るネフスキ一』大阪外国语大学, 2003 年)。なお文章中に「先日語つたところ」とあるから、この「學界新風景」連載記事にネフスキ一の活動を取り上げたものがあるはずである。

²⁸ イワノフ氏：ここで「更に一步進める人は、…三人だけ」というのは、当時の西夏文字研究者のことを指しているようだ。N.ネフスキ一『月と不死』(平凡社東洋文庫 185)の加藤九祚による「解説」中の「ネフスキ一と西夏学」(pp.326-333)[加藤『完本 天の蛇』(河出書房新社、2011 年、pp.182-190)]に、三人の交流状況が詳細に述べられている。A.И.イワノフは、もとペテルブルク大学の中国語非常勤講師。コズロフ探検隊将来の資料中から西夏語・漢語対訳語彙集『番漢合時掌中珠』を発見した。1922 年から在北京のソ連大使館に勤務しており、ネフスキ一は 1925 年に彼を訪ねている。なおカラハン大使は、「カラハン宣言」(1919, 20 年)で有名。

²⁹ 内藤湖南博士に伴われて外遊：大正 12 年(1924)7 月から翌年 2 月の内藤の欧州学術視察旅行に同行している。パリの国立図書館とロンドンの大英博物館が所蔵する敦煌発掘文献を調査するのが主な目的だった。内藤による「欧洲にて見たる東洋学資料」(全集第 12 卷所収)に旅行の概要が記されている。石濱自身は「御洋行の話を聞いて、^旅途時世も景気の好い折だし、こんな時に日夕親炙したらよからうとお伴を願つて快諾されたから、千載の一遇だ、行くと云つたら行くんだと、家へはダボをコネて出かけて終つた」と書いている(「僕の憂鬱」(内藤湖南への追悼録に寄せた文章)『支那学』7-3, 1934 年, p.54)。なお次注も参照。

日参しただけ³⁰で、他に振向きもしなかつたんだから、モダン・ボーイになつて歸つたのじやない。勿論、ロンドン娘の方にしたところが、短軀肥大、見るからに鈍重な顔をした石濱氏と、珍型においては氏に劣らぬ内藤博士³¹の二人旅だから、嘘にだつて袖を引っ張つたりなんぞはしなかつたらう。（元來、學者に堂々たる偉丈夫がゐるものか、ゐたら大抵偽者だ、と氏を弁護するこれも偽者でない方が言つてはゐるが）

◇石田幹之助氏の方は、石濱氏ほど語學はやつていないが、絶えず世界にひろがりゆく東洋學の進展には眼を注ぎ、この方面に自己のしつかりした足場をもつてゐる。かのモリソンが畢生の志業として蒐集した東洋關係の文獻に、加ふるに富豪岩崎が金に飽かして買ひこむ珍奇の圖書を、一手に引受けて鮮やかに處理してゆく手ぎはは、好個のライブラリアンではあるが、それらから蓄へ得た豊富な知識を以て、立ちどころに一通りの説明を與へるところ、また確に東洋史學が生んだ近來の才人たるを失はない。毎日圖書室に籠もつて、

國下大慧³²學士と共に、コツコツと博士志望者のために、資料提供の下積み仕事をやつてゐ

³⁰ ロンドンのブリティッシュ。ミウジアムに日参しただけ：記事にはさらに続けて「二人旅」などと記されているが、事実と異なる。内藤の「歐洲にて見たる東洋學資料」（注 26）から、やや長いが同行者についての記述を引用する。「もちろん、大英博物館における調査は予独りでやつたわけではなく、初めより予の調査を補助する目的で同行した文学士石濱純太郎氏あり、大阪外国语学校教授で蒙古語研究のため支那および歐洲に留学することになつてゐた文学士鴛淵一氏[内藤の女婿となる(筆者注)]が上海から同行し、またわが京都大学助教授文学博士今西龍氏が在外研究員として昨春から倫敦に滞在していられたのが、やはりこの調査を補助せられ、抄写その他のことは愚息乾吉も従事し、案外手が多かつたので、すべての調査が迅速に運んだわけである。鴛淵・石濱の二氏はなお大英博物館における満洲語・蒙古語に関するあらゆる文獻を調査し、さらに同地東洋語学校に蔵する蒙古語・満洲語等の文獻も調査して、その目録を製作することになった。倫敦には滞在およそ五週間にてひとまず巴里に還り、それから氣候の寒くならぬかつ日の短くならぬ間に大陸旅行を企て、十月初旬から独逸、奥地、瑞西の旅に出かけた。独逸においては伯林ならびにライプチヒでやはり東洋学に関する資料を若干閲覧した。」

いっぽうで「學術研究にばかり日を送つたわけではなく、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリアなどをまわるの間、名のある美術館や博物館をほとんど歩き、西欧芸術を鑑賞した」（三田村泰助『内藤湖南』中公新書 278,1972 年, p.218）。なお、石濱文庫にはこの歐州學術視察旅行の際の客船の乗船名簿をはじめ、歐洲各地の絵はがきなどの資料が存し、整理を待つ状態である。

³¹ 短軀肥大…珍形…：石濱は「恭仁山荘(湖南の晩年の居)へは馬鹿に遠慮をしてしまう事となりました。あながち山荘迄肥った身体を運ぶのがつらいからではなかつたんだ」と書いている（前掲「僕の憂鬱」p.53）。また内藤湖南については「小さい時からしょびたれていて、それが評判だった湖南は東京に出てからも、たらちねが母のまくらことばであるように、「風采すこぶるあがらず」がつねに彼のまくらことばであった。」（青江舜二郎『龍の星座—内藤湖南のアジア的生涯』中公文庫、1980 年、p.119）という。

³² 國下大慧：岩井大慧（いわい・ひろさと、1891-1971）、東洋史学者。大正 13 年東京のモリ

る暇に、ひそかに専念する『唐代の文物制度の研究』³³は氏の博士論文たるべきものだといふ。

◇京大の羽田亭³⁴博士と大阪の石濱純太郎氏と、そしてこの石田氏の三人を結んで、西域研究における三鼎と斯界では呼んでゐる。各自それぞれに確乎たる基礎學問をもつて、東洋文明の源流といふべき西域の研究に入りつつあるのであるから、この上は歐米學者の根氣よさを體得さへすれば、この方面における三人男たる期待には背かないだらう。

◆注記における参照文献

「石濱純太郎先生著作目録」「石濱純太郎先生年譜略」「石濱先生古稀記念東洋學論叢」吹田、石濱先生古稀記念會、1958年、所収。

『大阪外国语大学70年史』箕面、大阪外国语大学70年史刊行会、1992年

ソソ文庫副主事。昭和23年から40年まで東洋文庫長（デジタル版 日本人名大辞典+Plusの解説から抜粋）。

<http://kotobank.jp/word/%E5%B2%A9%E4%BA%95%E5%A4%A7%E6%85%A7>、2012年3月13日閲覧）。『石濱先生還暦記念論文集』（吹田・關西大學東西學術研究所、1958年）に論文「別乞という言葉と巫（シャマン）に就いて」を寄せている。

³³ 唐代の文物制度の研究：石田の初めての著書は昭和7年（1932）の『欧人の支那研究』であり、この記事とはやや異なった方向にまで石田の研究は進んだようである。もちろん唐代に關わる著述『長安の春』（1941）や『唐史叢鈔』（1948）もある。

³⁴ 羽田亭：1882-1955。東洋史学者・言語文献学者、京都大学教授・総長。おもな研究領域は北アジア史、西域史・中央アジア史・敦煌学、東西交渉史、民族学。注4で述べたように、石濱は大阪外国语学校在学時に羽田の教えを受けた。石濱も論文「回鶻文普賢行願品残巻」を寄稿した『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』の献呈日（1950年11月）に羽田と弟子ら献呈者が撮った記念写真では、石濱は羽田の向かってすぐ右横に座って写っている（『京大東洋学の百年』京都大学学術出版会、2002年、p.156）。